

P-78

痤瘡の和漢薬療法に関する基礎的研究 (第16報) -各種薬剤の *Propionibacterium granulosum* に対する阻止効果-

富山医科薬科大学・皮膚科

○ 檜垣修一, 中村元一, 北川太郎, 諸橋正昭

＜目的＞ *Propionibacterium species* は現在十種類以上存在し、その多くは農業や酪農関係に関連して研究報告される場合が多い。一方、ヒトに関連するものとして *Propionibacterium avidum*, *Propionibacterium acnes*, *Propionibacterium granulosum* の3種類が通常あげられる。中でも、*P. acnes* や *P. granulosum* は痤瘡の皮疹より検出され痤瘡の発症に関与すると言われている。痤瘡に対する漢方薬の臨床効果について現在多くの報告がされているが、*P. granulosum* と漢方薬に関する基礎研究は皆無である。今回、各種薬剤の *P. granulosum* に対する阻止効果を検討したので報告する。

＜方法＞ 数名の炎症性痤瘡患者を対象とした。両菌種の同定は Rapid ANA II system を用いて行い、痤瘡に頻用される漢方薬の十味敗毒湯や抗菌剤の minocycline を使用した。痤瘡患者皮疹から培養された *P. granulosum* に対し、日本化学療法学会 MIC 測定法に準拠した MIC の測定と被験薬剤に対する感受性や抑制遊離脂肪酸産生量を測定した。併せて同一痤瘡患者から分離された *P. acnes* を control とした。

＜結果＞ Control は痤瘡患者皮疹由来 *P. granulosum* と比較して、菌の発育量や lipase 活性の程度はかなり高かった。逆に、被験薬剤による菌の発育量や lipase 活性の抑制度は *P. granulosum* では高度であった。両菌種に対する被験薬剤の MIC の差異は特になかった。*P. granulosum* において minocycline による抗 lipase 活性は control 同様直接的、十味敗毒湯は抗菌作用を通じて間接的であった。

＜考察＞ 痤瘡皮疹から検出される嫌気性菌は *P. acnes* のみと考えがちであるが、頻度は少ないながら *P. granulosum* も存在し免疫的研究もなされている。今回、*P. granulosum* で微弱ながら lipase 活性の働きが確認され、痤瘡発症の一端を担う事が示唆された。*P. granulosum* は被験薬剤による抑制効果が強く、種々の漢方薬による抑制効果も期待される。*P. acnes* は生物型や血清型に分類されるが、*P. granulosum* についても型別判断による痤瘡の一層の研究が期待される。